

## ライチョウ生息状況調査について

### 1. 南アルプス赤石岳及び荒川岳における生息状況調査

南アルプスにおける生息地のコアとなる赤石岳・荒川岳の範囲を調査対象箇所とし、平成 29 年 6 月 15 日から 21 日に 5 名で、入下山を含め 7 日間の調査を実施した。

#### (1) 調査結果

##### 1) 個体ならびに痕跡の散布

発見したライチョウとその痕跡、鳴き声等が聞かれた地点を図 2 に示した。図中、赤い四角はナワバリ雄、青い四角は独身雄、赤丸は雌、N(数字)は巣と産卵数、水色の丸は抱卵糞、赤三角は砂浴び跡、黒四角は鳴き声(フライング・ソングのみ、地鳴き等は含めていない)、黄色の四角は通常糞・羽等である。

個体ならびに痕跡は稜線周辺で発見され、頻度(密度)は大聖寺平を境に、南部の赤石岳から百間平で高く、荒川岳(前岳・中岳・東岳(悪沢岳))、千枚岳で低かった。

##### 2) 推定ナワバリならびに推定生息数

ナワバリや痕跡の密度、ライチョウの行動の違いなどから、大聖寺平を境に南部を赤石岳、北部を荒川岳と称し、分けて記述することとする。

ナワバリの大きさは、赤石岳～小赤石岳の間で観察された二度のナワバリ雄と独身雄の闘争・追尾と、百間平での同様の闘争、ならびに隣接するナワバリのナワバリ雄同士の行動から、およそ 4ha と推定した。他の山域でも、地形・植生等の環境を加味しつつ、おおむね 4ha を適用した。

赤石岳の推定ナワバリ数は 20、独身雄が赤石岳周辺で 2 個体、百間平で 2 個体、合計 4 個体観察されたところから、推定生息数は雄 24 個体、雌 20 個体の合計 44 個体である。これをまとめて表 1 に示した。

表 1 百間平～千枚岳のライチョウ推定ナワバリ数・推定生息数

山域	推定 ナワバリ数	推定生息数				性比
		雄	独身雄	雌	生息数	
赤石岳	20	24	4	20	44	0.55
荒川岳	10	10	0	10	20	0.50
合計	30	34	4	30	64	0.53

独身雄は百間平周辺に 2 個体、赤石岳周辺に 2 個体

ナワバリは、百間平の標高 2,700m から赤石岳の標高 3,120m を経て大聖寺平の標高 2,650m の範囲の稜線部に認められた。百間平と赤石避難小屋周辺は、比較的地形が平らなところから、ナワバリは、規模は小さいが面的に認められた。これ以外の山域では、百間平から赤石岳の西部までは多少離散的に、赤石岳から大聖寺平にかけては境界を接して、稜線に従って一直線に、かつ連続的に認められた。これを図 3 に示した。

荒川岳の推定ナワバリ数は 10、推定生息数は雄 10 個体、雌 10 個体の合計 20 個体である。独身雄は観察されなかった。これをまとめて表 1 に示した。

ナワバリは荒川小屋付近の稜線部、標高 2,650m から標高 3,141m の東岳を経て千枚岳の西部 2,850m の稜線部に、標高の高いところを中心に離散的に認められた。これを図 3 に示した。

東岳の北に派生する枝尾根では巣を 2 個発見した。産卵数は 5 卵と 6 卵である (図 3)。

下部の巣は、風衝面である尾根の西側、標高 3,000m 地点にある脛丈のハイマツのパッチの下端林縁部に作られていた。尾根からは約 20m の地点である。

上部の巣は、風背面である尾根の東側、標高 3,060m 地点の、やはり脛丈のハイマツのパッチの下部にあるギャップ近傍に作られていた。尾根からは約 40m の地点である。

### 3) その他

獣糞は、百間平でキツネの毛糞を 1 つ発見したのみである。この糞の内容物は、ネズミ sp. と思われる毛と骨のみで、鳥類の羽等は含まれていなかった。

シカの痕跡は百間平から千枚岳の間の高山帯全域に認められた。

## (2) 考察

調査山域としての赤石岳の推定ナワバリは 20 ヶ所、推定生息数は 44 個体である。同様に荒川岳の推定ナワバリは 10 ヶ所、推定生息数は 20 個体である。

百間平から大聖寺平の間は、百間平から赤石岳の間に抜けはあるものの、おおむね連続してナワバリが認められた。ナワバリは、稜線の風衝側、風背側いずれかに偏るのではなく、植生等条件の良い側に一列に作られていた。ライチョウの行動観察から、ナワバリ範囲は約 4ha とやや大きめに推定したが、低密度ということもなく、生息状況は健全と考えられる。

隣接する山域であるが、荒川岳では、ナワバリは高標高部分に集中しており、稜線部であっても、頂部と頂部のつなぎの部分には認められず、空白の部分が大きく広がっていた。これら空白な山域であっても、環境的に充分ナワバリ形成が可能と思われる場所が多かった。このナワバリ密度が、正常な個体群変動の範囲内であるか否か不明だが、ボトムに近い状態であると考えられる。

(3) 写真



左：写真1 富士見平から赤石岳、小赤石岳を望む。

右：写真2 赤石小屋分岐付近から小赤石岳を望む。



左：写真3 赤石岳北西斜面は風衝地で、緩やかな斜面が広がるナワバリはこちら側に作られていた。

右：写真4 赤石岳付近で見られたナワバリ雄と独身雄の闘争。





左：写真5 百間平はその名の通り平坦。ナワバリは連続的に形成されていた。

右：写真6 百間平から百間洞に至る斜面。標高約2,600mまで調査を実施。ナワバリは標高2,700mまで形成されていた。



左：写真7 小赤石岳東斜面の調査風景。風衝面でナワバリが形成されていた。

右：写真8 大聖寺平。風背斜面の尾根直下には雪渓が残る。やはり、本年の残雪は多い。



左：写真9 中岳北側風衝斜面。凹部には雪がたまる。北に派生する小尾根にはナワバリは認められなかった。

右：写真10 東岳の東に位置する標高3,032mの通称丸山付近から千枚岳を望む。



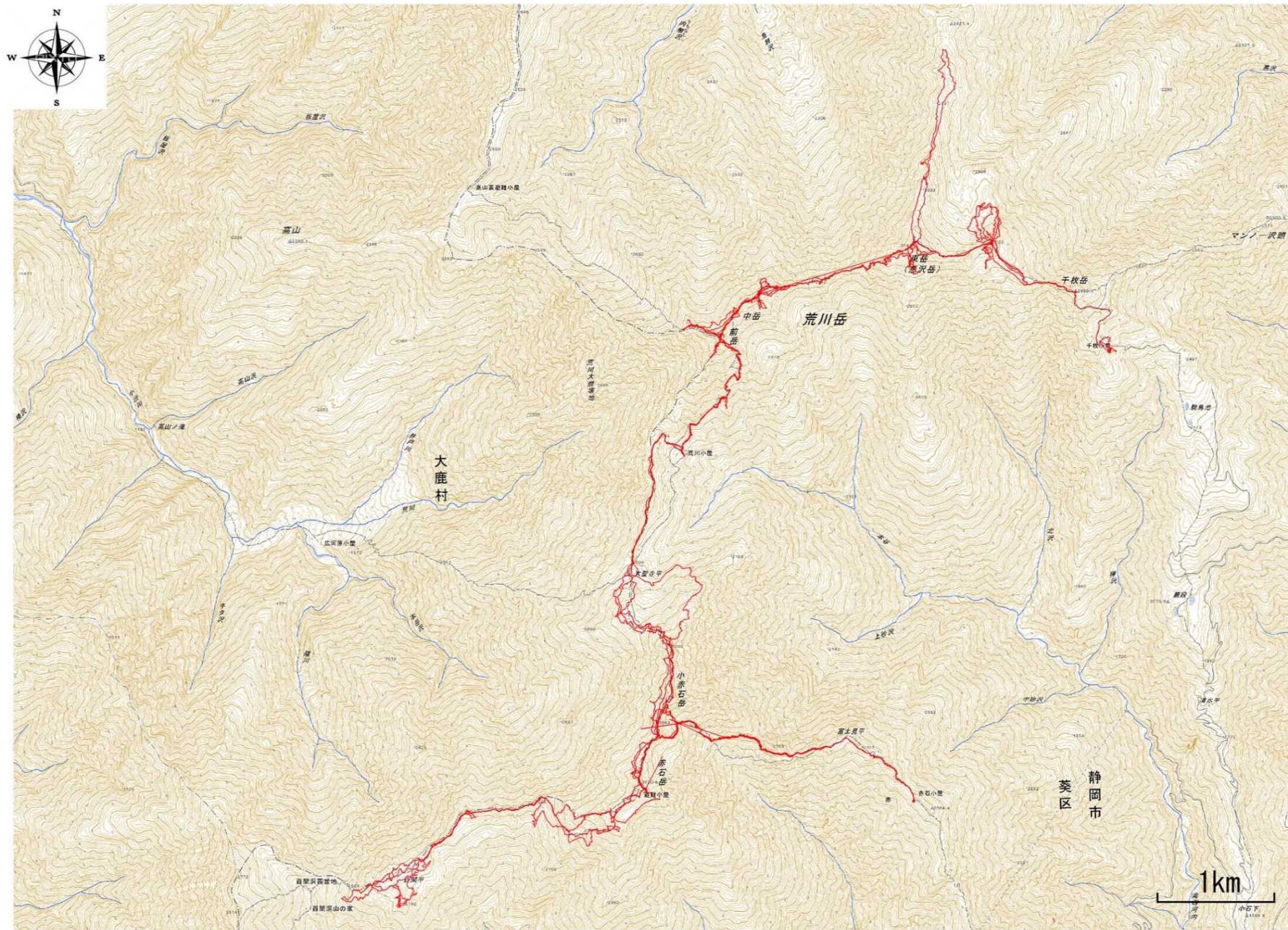


図1 踏査経路のGPSトラック



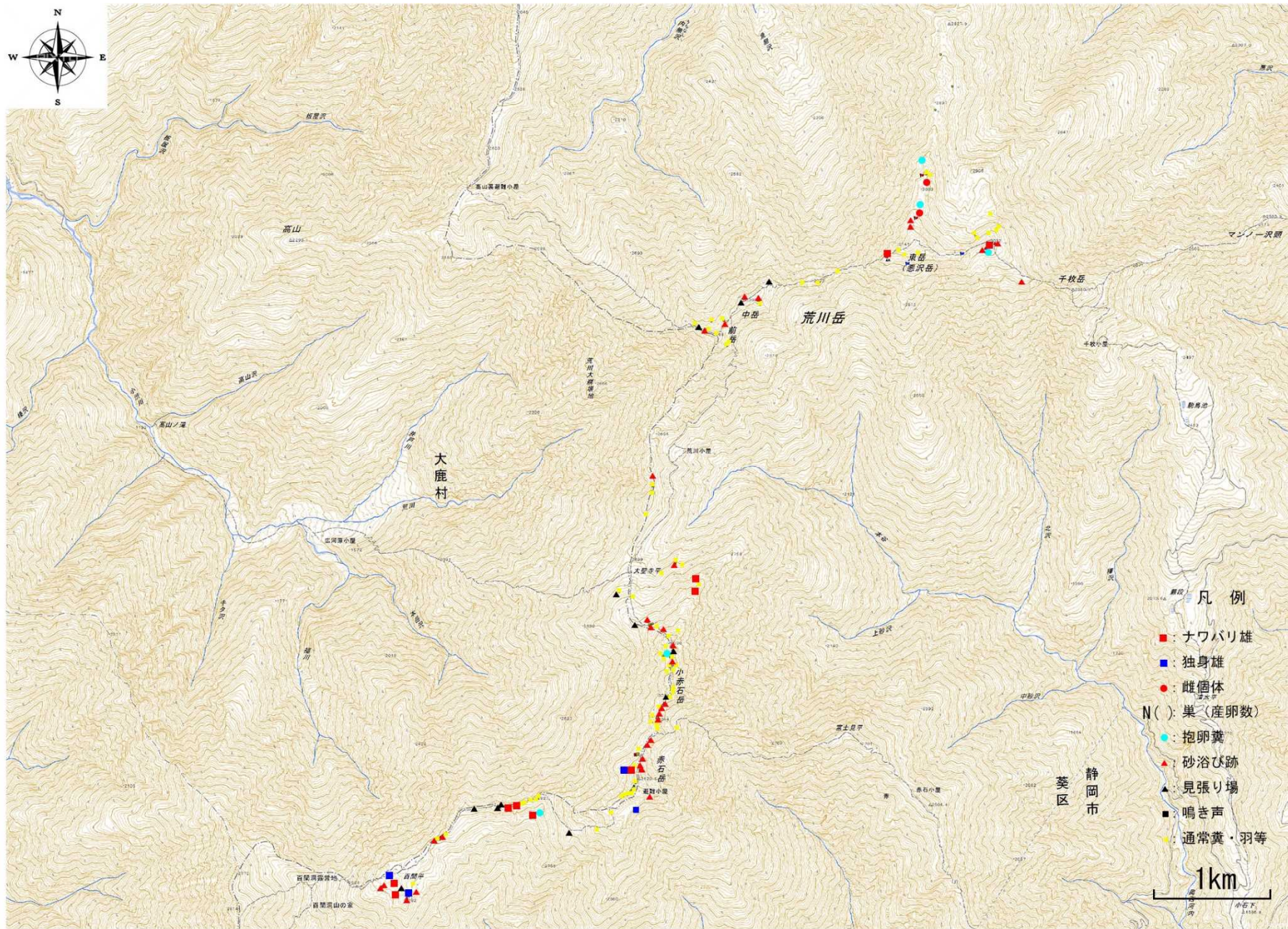


図2 発見したライチョウと生活痕跡の位置



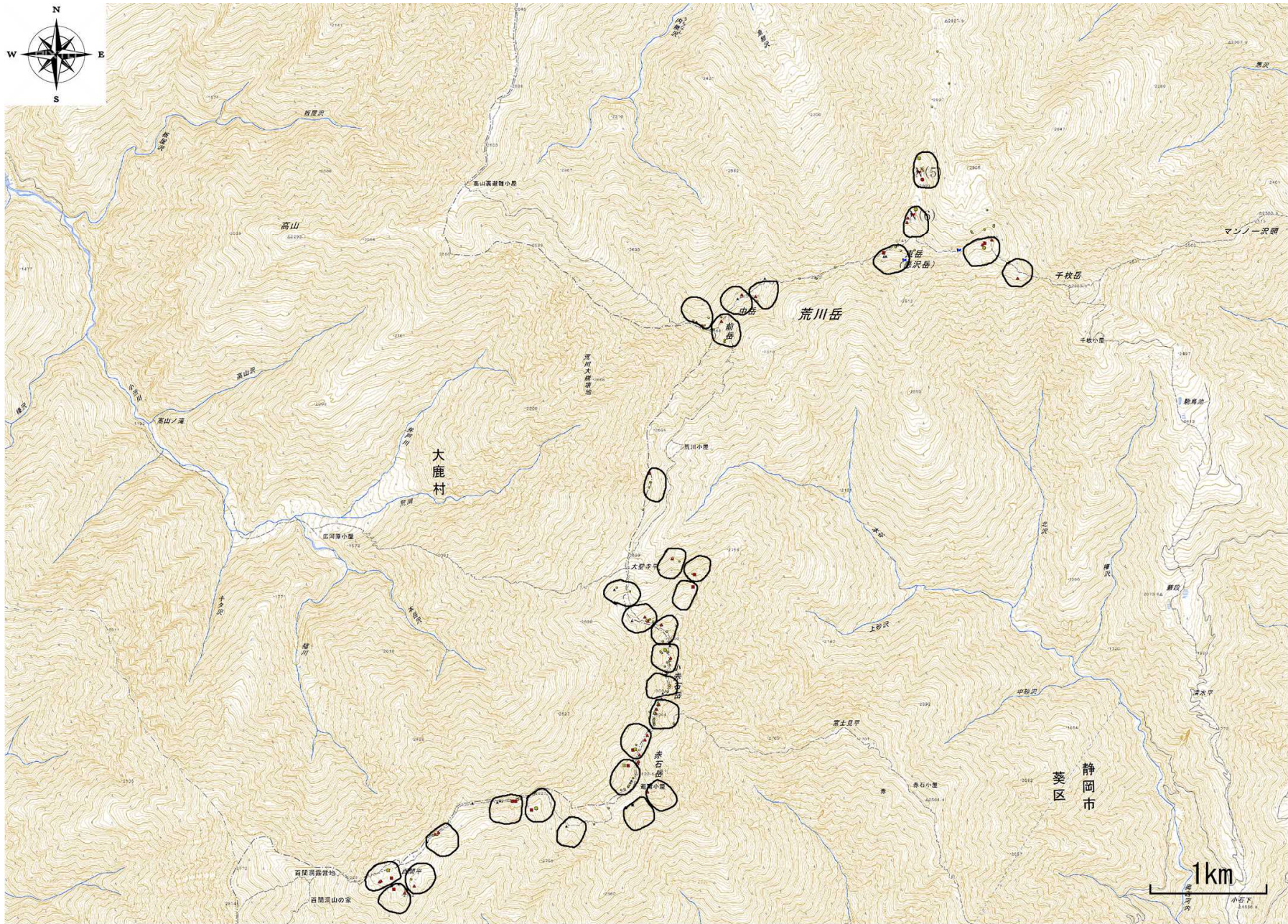


図3 推定なわばり散布図



## 2. 新潟焼山におけるライチョウ生息状況調査

### (1) 概要

ライチョウ保護増殖事業の一環で焼山におけるライチョウ生息状況調査を行ったもの。新潟焼山は噴煙活動の活発化等により平成 27 (2015) 年 3 月に山頂から 1 km 範囲が立入禁止となっており、ここ 2 年間のライチョウ生息状況が確認できていなかった。新潟焼山には 15 羽程度の貴重な個体群があり、また、火打山のライチョウにとっても越冬場所となっている重要な場所である。今回、妙高市及び糸魚川市から許可を得て 2 年ぶりにライチョウの生息状況調査を行った。

### (2) 結果

#### 1) 10 月 18 日

山頂付近にてメス 1 羽ヒナ 3 羽の家族を 2 家族発見し合計 8 羽を確認した。メス親は 2 羽とも足輪がついていた。ヒナ 2 羽を捕獲し足輪の装着及び血液採取を行った。最初に捕獲したヒナ 1 羽は捕獲作業の事故により死亡してしまった。

発見：8 羽

標識及び血液採取：2 羽

#### 2) 10 月 19 日

山頂付近にてメス 1 羽ヒナ 2 羽の家族を発見し未標識のメスとヒナ 1 羽に足輪の装着及び血液採取を行った。また、昨日の家族を含む 8 羽程度の群れを確認した。また前述と同一個体群の可能性はあるが 6 羽の群れも発見している。

発見：8 羽 +  $\alpha$

標識及び血液採取：2 羽

#### 3) 結果まとめ

18 日に発見し一部を標識した 8 羽と 19 日の前日のひと家族 (4 羽) を含む 8 羽程度の群れを確認したので 12 羽以上の個体群が新潟焼山で生息していることがわかった。

新潟焼山の個体群：12 羽 +  $\alpha$

#### 4) その他

新潟焼山の山頂付近はほとんどが岩場であり平坦な場所が少ないため、捕獲作業に非常に苦労した。死亡個体も 1 羽でてしまった。それに加えて新潟焼山のライチョウは緊張感が強く捕獲の際に近寄ると飛び立って遠くへ逃げてしまう個体がほとんどであった。



### (3) まとめ

噴火口付近の火打山側の斜面は矮性低木の枯損がひどくライチョウが生息できる環境ではなかった。しかし、噴火口から離れた場所では環境は維持されており、新潟焼山が以前と同様のライチョウ生息環境を維持していることが確認できた。新潟焼山の個体群もこれまでどおり維持されていると考えられ、火打山とならび頸城山塊における重要な生息地であることが確認できた。

### (4) その他

立入規制範囲の入出の際は妙高市総務課危機管理室へ衛星携帯電話により連絡した。

### (5) 写真

平成 29 年 10 月 18 日



左：写真 11 焼山山頂付近（奥の尾根の向こうが現在の噴火口）

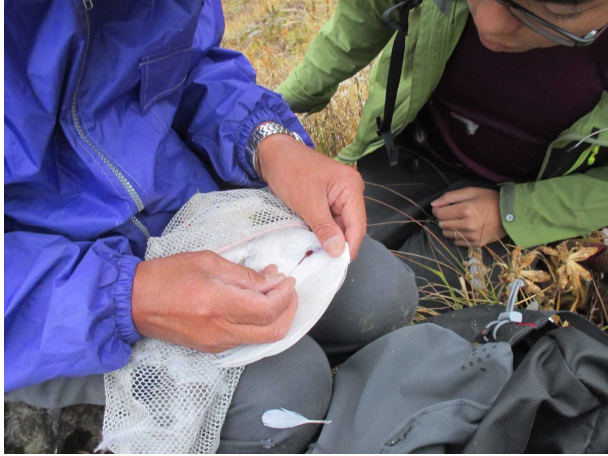
右：写真 12 噴火口付近は矮性低木がほとんど枯れていた



左：写真 13 噴火口から離れた場所は矮性低木の実が豊富であった

右：写真 14 焼山山頂付近（金山方面）





左：写真15 捕獲したライチョウから血液を採取する様子



右：写真16 近づくと飛んで逃げる新潟焼山のライチョウ

平成29年10月19日



写真17 積雪の中での調査の様子



写真18 新潟焼山のライチョウ